



2023年10月21日（土）
山形大学人文社会科学部棟301教室
公開シンポジウム

古代アンデスとリャマ 文明形成をめぐる新視点

- 12：30- 受付開始
- 13：00-13：10 趣旨説明
- 13：10-13：40 鶴見英成（放送大学）
「リャマと神殿の誕生ーアンデスの大地形に即した文明形成論」
- 13：40-14：10 山本睦（山形大学）
「リャマと神殿社会の展開ーペルー北部における神殿の多様性」
- 14：10-14：40 鵜澤和宏（東亜大学）
「リャマ飼育がもたらした形成期神殿での動物利用の変化
-動物儀礼の連続性と転換が意味するもの-」
- 14：40-15：00 休憩
- 15：00-15：30 瀧上舞（国立科学博物館）
「リャマとヒトの生業ーリャマ利用に伴うヒトの食性変化」
- 15：30-16：15 コメント
関雄二（国立民族学博物館）
渡部森哉（南山大学）
稲村哲也（放送大学）
- 16：15-16：30 休憩
- 16：30-17：30 総合討論



©鶴見英成

本シンポジウムは、アンデス原産のラクダ科動物、リャマを切り口に、古代アンデス文明の形成および展開を解明していこうとする新たな研究のキックオフイベントです。

アンデス文明が開いた地域には、海岸砂漠から氷河をいただく高地、アマゾンの熱帯雨林といった多様な生態環境が存在します。そのなかで、リャマは、各地で生産される資源を運搬する荷駄獣として、古代社会の展開に重要な役割をはたしたと考えられてきました。そして、アンデス文明における社会動態を論じる際の基礎として、定住的な農耕社会に主眼をおき、そこに牧畜という生業が追加されるというようなモデルが想定されてきました。しかし、リャマの牧畜を農耕社会の展開を促進する補助的な要素とみなす従来の視点から角度を変え、リャマを飼育していた集団（牧民）とトウモロコシをはじめとした農耕に従事していた集団（農民）の邂逅は、それぞれがもつ生業や文化の融合を導き、それによって生じた社会変容の新たなステージと捉えることを提案します。

本シンポジウムでは、考古学と総合資料学の協働によって、正体のみえなかった「古代にリャマを飼育した牧民」の実態に迫ることで、アンデス文明形成期（前3000年—紀元前後）に生じた社会変化を新たな視点からとらえることを目指し、今後の研究の方向性を模索していきます。

左：大学へのアクセス
右：キャンパスマップ

